

特別養護老人ホームで生活する高齢者の エンパワメント支援に関する検討 (第2報) ～ケアスタッフの意識・行動分析～

伊藤 智子・加藤 真紀・梶谷みゆき
常松さゆり*・諸井 望**・金築真志***

概 要

2007年本紀要第1巻にて標記の第1報を報告した(伊藤, 2007)。2008年は, 特養で生活する高齢者のエンパワメントには, ケアスタッフの意識・行動が大きく関わっていると考え, 前年度調査対象とした高齢者を担当するケアスタッフにケア意識に関する半構成的面接を行い, この2年間の調査結果を合わせて再度検討を行った。その結果, 1) 特養入居受け入れ支援 2) 生活の継続性を重視する意志の尊重 3) 視聴覚機能を補うケア 4) 家族とのほどよい距離感を感じるケア 5) 馴染みの人との関係維持と新たな人間関係づくり支援 6) 日常生活の中での役割づくり 7) 落ち着く居場所づくり 8) 看護職による疾病の管理の8点が明らかとなった。

キーワード: 特別養護老人ホーム, 高齢者, エンパワメント
社会関連性, ケアスタッフ

I. 研究の目的

特別養護老人ホーム(以下「特養」とする)で生活をする高齢者のエンパワメント支援のポイントとして1) 特養入居の受け入れ支援, 2) 役割づくり 3) 家族とのほどよい距離感, 4) 居場所づくり, 5) 視聴覚機能を補うことが重要であることが明らかとなった(伊藤, 2007)。高齢者にとって大切なのは, 残された能力に焦点を当てて社会的なつながりを積極的に作り出すことである(松岡, 2002)が, 施設入居後の社会関連性は施設ケアの内容に大きく影響されており, ケアスタッフの意識・行動が重要である。この研究は, 2006年の調査データにケアスタッフ(ケアワーカー, 看護師)の意識・行動

に関する調査結果を加え, 再度, 障害を持ちながら特養生活を送っていても, 社会との関係をもち続けることを可能にする要因を分析し, 特養生活を送る高齢者のエンパワメントの可能性を広げるケアについて検討することを目的とした。

II. 調査の対象と方法

調査対象は2006年と同様(伊藤, 2007)の予定であったが, 2名の死亡のため, その2名を除く9名とした。(表1)

2007年は, 2006年調査対象となった高齢者の担当ケアスタッフ(ケアワーカー, 看護師)に対して, 当該高齢者との出会い, 日頃の関わり, 当該高齢者のケアにあたる際意識していること, 自分と当該高齢者との相互変化, 当該高齢者のこれからの生活とケアスタッフの役割について半構成的面接を行った。面接内容は全て録音し, 逐語録にまとめ, エンパワメントに関連があると思われるケアスタッフの意識・行動を

* 認知症高齢者通所介護施設NPO法人やわらぎ

** 特別養護老人ホーム湖水苑

*** 出雲市役所健康増進課

本研究は, 本学平成19年度特別研究費により行った。

表1 対象の概要

| 事例 No. | 性別 | 年齢 | 入居年月 | 入居時の家族構成 | ケアスタッフ(調査対象者)の概要 | | | |
|-----------|----|----|-------|----------|------------------|---|-----|---|
| | | | | | ケアワーカー | | 看護師 | |
| | | | | | 年代 | 性 | 年代 | 性 |
| 1 | 女 | 84 | H13.5 | 夫婦2人暮らし | 20代 | 男 | 50代 | 女 |
| 2 | 男 | 94 | H12.4 | 夫婦2人暮らし | 30代 | 女 | 40代 | 女 |
| 3 | 女 | 87 | H12.7 | 娘夫婦と同居 | 20代 | 女 | 50代 | 女 |
| 4 | 女 | 87 | H18.2 | 息子夫婦と同居 | 20代 | 男 | 50代 | 女 |
| 5 | 男 | 78 | H13.7 | 夫婦2人暮らし | 30代 | 女 | 40代 | 女 |
| 6 | 女 | 87 | H18.1 | 娘夫婦と同居 | 20代 | 女 | 50代 | 女 |
| 7 | 男 | 84 | H16.7 | 独居 | 30代 | 女 | 50代 | 女 |
| 8 | 女 | 69 | H16.6 | 息子と2人暮らし | 30代 | 女 | 50代 | 女 |
| 9 | 女 | 85 | H13.4 | 娘と同居 | 30代 | 女 | 50代 | 女 |

表現している内容を研究者2名にて抽出し、共通する意味内容をサブカテゴリとしてまとめ、さらに抽象度を上げてカテゴリ化を行った。

Ⅲ. 分析方法

第1報の結果(伊藤, 2007)を, 2007年に実施したケアスタッフへの半構成的面接結果(表2-①~⑨)と合わせ, 第1報で整理した高齢者エンパワメント支援の5つのポイントを念頭に, 再度特養で生活を送る高齢者のエンパワメント支援について研究者6名で検討した。

Ⅳ. 倫理的配慮

2007年調査を実施するにあたり, 本学の研究倫理審査委員会の承認を得た。

協力施設である特養2施設の施設長に対し, 研究を実施したい旨の説明と, 研究対象者の選定について書面にて同意を得た。ケアスタッフへの半構成的面接について, 本人に研究の趣旨を説明し, 書面にて同意を得た。個人名は2006年調査結果と今回の担当ケアスタッフのデータが揃った時点で記号化し, 個人の特定ができないように配慮した。

V. 結果及び考察

以下抽出したケアスタッフ意識要素カテゴリを【】, サブカテゴリを『』, データを「」で示した。また, 昨年データを〔〕で示した。

1. 事例別のエンパワメント支援のポイント

1) 事例1について

本事例は, 生活の主体性領域と生活の安心感領域得点が入居前後で変化がなかった事例である。生活の主体性領域得点が維持できているのは施設入居を本人が決定していること, 生活の安心感領域得点が維持できているのは, 家族との頻回の面会や外泊時の近所の人たちの会話があることだったが, 【自分のやることをコントロールしてもらう】【生活意欲をもってもらう】【本人の意志を大切にする】【生活のメリハリが重要である】ことも, 生活の主体性を支える要素として考えられた。生活の安心感領域得点が維持できているのは, 「毎日顔を見ることは必ず(看護師)みんなで言っています。」から【早く変化に気づく】体制をつくっているためと思われる。また, スタッフの「終末をいっしょに過ごしたい。」という発言は【今の生活の継続】の先に終末期があるという意識からきており, それが生活の安心感に繋がっていると考えられた。

2) 事例2について

表2-① ケアスタッフの意識・行動要素（事例1）

| | カテゴリー | サブカテゴリー |
|-----------------|--------------------------|---|
| 生活の 主体性 | 自分のやることをコントロールしてもらう | 身体の負担にならないように自分の力を自覚してもらう |
| | 生活意欲をもってもらう | 生活意欲をもってもらう |
| | 本人の意志を大切にする | 押しつけない介助をしたい |
| | | 食べることが一番楽しみだから食事制限を細かく言わない 遠くから見守りたい |
| 生活のメリハリが重要 | 生活のメリハリのため、自宅への外出ができればよい | |
| 社会への 関心 | 外出支援 | 日常的な自宅への外出をさせてあげたい |
| 他者との 関わり | 声かけ | 楽しみなど主人とのお茶会のために外出をかなえる |
| | | 声のかけやすい場所に居ることをずっとやっていきたい リビングでの声がけ |
| 身近な 社会 参加 | 今ある活動への誘い | 活動への誘い方を考える |
| | 活動をつくる | やることをつくってあげたい |
| 生活の 安心感 | 安らかな生活のために筋力の維持が出来たらよい | 安らかな生活のために筋力の維持が出来たらよい |
| | 変化に早く気づく | 毎日顔を見るようにしている |
| | 今の生活の継続 | 終末を一緒に過ごしたい 今の生活を続けてもらいたい |

表2-② ケアスタッフの意識・行動要素（事例2）

| | カテゴリー | サブカテゴリー |
|----------------|--------------------------|--|
| 生活の 主体性 | 本人の思いを尊重する | こっちの思いを押しつけない 歩みを受け止める |
| | 話を受け止める姿勢をもつ | 話を受け止めて教えてもらうという姿勢 |
| | | 戦争の話を聞かせてもらう |
| | 思いを叶えてあげる | 思いを叶えてあげる |
| 今を維持するための会話をする | 物忘れを少なくするために、いつもと違う会話をする | |
| 他者との関わり | 話し相手が必要 | 話し相手が必要 |
| 身近な 社会参加 | 同じ地区の人との接点をつくる | 同じ地区の人に会いに行くことを進める |
| | | 同じ地区の人と昔話を促す |
| | | 同じ地区の人と接する機会を提供 |
| 生活の 安心感 | 亡くなった後のことの相談にのる | 後先のことを聞き出す 亡くなった後のことを応えられるようにする 本人の心配を家族にもわかっていただく |
| | 訴えに対する丁寧な対応 | 痛みの訴えにきちんと対応する |
| | 身体に無理のないようにする | 身体に無理のないようにしてあげる |
| | 内服をしてもらう | 穏やかな生活のお手伝い |
| | 内服をしてもらう | 内服をしてもらう |

本事例は生活の主体性領域と社会への関心領域得点が入居前後で変化がなく、施設入居後、当分は落ち着かず新しい環境に馴染めなかったが、居室に机と電気スタンドを置くことで自分の居場所ができると落ち着きがみられたことから家庭での生活を重視し、家庭生活を継続でき

る工夫の重要性が示唆された事例である。居室に机と電気スタンドをケアスタッフが準備する行動に至った背景にはスタッフの【本人の思いを尊重する】【話を受け止める姿勢をもつ】【思いを叶えてあげる】【今を維持するための会話をする】という意識があったから実現したと考

表2-③ ケアスタッフの意識・行動要素（事例3）

| | カテゴリ | サブカテゴリ |
|-------------|------------------|--|
| 生活の 主体性 | 自信をもつていただく | 自信をもてることをお願いする 自信をつけるために自分の力を使う むやみに手を貸さない 動くことをする |
| | 生活にメリハリをつける | 生活の流れをつくるために仕事をお願いする 生活にメリハリをつける |
| | 希望を叶える | 希望を叶えて生活に楽しみをみつける 楽しみにしていることを叶える |
| | コミュニケーションをしっかりとる | 一緒にお話をして、したいことを聞く 本人の本音を聞く |
| | 現状維持 | 合ったようにしてあげる 声かけ |
| | 日常生活をよく見る | 日常生活をよく見る |
| 他者との 関わり | 他の利用者さんとの関係をつくる | 一人で居られないように人の輪の中で 自分から話をしない方なので、他の利用者さんとの関係づくりをする 心遣いの一言を大切に |
| | スタッフとの距離を縮める | 距離を縮めるために一緒に外出する 日々一緒にいるから話しやすい |
| | 家族との関わりを大切ににする | 家族に会いたい気持ちをくみ取る 家族の面会時に仲をもってあげたい |
| | ゆっくり話す時間をつくる | 本音で話すゆとりのある時間をつくる そばでお話を聞く |
| 身近な 社会参加 | 役割をもつていただく | 仕事をしたい気持ちに応える 必要とされている感じをもってもらうために仕事を頼む |

えられた。社会への関心領域はスタッフの意識的な働きかけがない中でも維持できていた。これは、読書などの日課があり、利用者なりの確立された生活があるためと考えられた。

3) 事例3について

本事例は、生活の主体性領域、社会への関心領域、他者との関わり領域、身近な社会参加領域の4領域とも入居前後で変化がなく、できるだけ自分のことは自分でできるようになりたいという思いが主体性を維持することに繋がっていると考えられた事例である。【自信をもつていただく】【生活にメリハリをつける】【希望を叶える】【コミュニケーションをしっかりとる】【現状維持】【日常生活をよく見る】は、その思いを支えていると考えられた。【ゆっくり話す時間をつくる】【他の利用者さんとの関係をつくる】【スタッフとの距離を縮める】【家族との関わりを大切ににする】から、スタッフが本人との関係づくりを強く意識し、その効果が出てい

ると考えられた。身近な社会参加領域については、【役割をもつていただく】が抽出され、実際におしほり・落とし紙たたみを自分の役割と考えていた。自分の役割を探している人のため、本人の関心事に照らし合わせた役割づくりを考える必要がある。

4) 事例4について

本事例は、生活の主体性・他者との関わり・生活の安心感領域に入居前後で変化がなかったが、社会への関心領域の得点が0点であり、その要因は視力低下と考えられた事例である。また、家族の介護力が不十分なためとは言え、本人の納得により施設入居をしたことが、主体性の維持に繋がっていると考えられた事例であるが、本人を「自分でできることは自分でやりたい人」と認識し、【本人の意志を尊重したい】【生活のメリハリを作ってあげたい】【本人に無理のないケア】【現状維持のためのコミュニケーション】を意識していることで、その主体性維

表2-④ ケアスタッフの意識・行動要素（事例4）

| | カテゴリ | サブカテゴリ |
|---------|-------------------|--|
| 生活の主体性 | 本人の意志を尊重したい | やりたいことをしてもらう |
| | 生活のメリハリを作ってあげたい | 生活のメリハリを作ってあげたい |
| | 本人に無理のないケア | 無理をされないようにする 時には過剰なケアをする |
| | 現状維持のためのコミュニケーション | 笑える話をする 励ましの声かけ |
| | 前に回って話す | 前に回って話す |
| 社会への関心 | 外出させてあげたい | 外出させてあげたい |
| 他者との関わり | 職員とのよい関係を作る | ハッキリ言う 好みの職員が偏らないようにケアの統一を図る |
| 身近な社会参加 | 役割を作る | 一緒に草抜きをする 仕事のバリエーションを作る |
| 生活の安心感 | 自分の存在感を感じるケア | 大事にしている気持ちが伝わるようにする |
| | 看護師の役割を果たす | 医師の指示を仰ぐ ナースは重度の人を先に見る 重度化したときのカンファレンス しっかり見てあげたい |
| | 落ち込みのフォロー | 精神面でのカバー 落ち込んだときのカバー 良い状態で生活して欲しい |

持の支えとなっていると考えられた。身近な社会参加領域では、施設入居後の得点が下がっているが、【役割を創る】が抽出され、『一緒に外で草抜きをする』『仕事にバリエーションをつくっていかんといけん』など、役割を創る関わりをケアスタッフが意識していることがわかった。本人と共に社会参加しながら本人らしさを尊重した役割づくりを考えることが重要である。生活の安心感領域得点は維持できていることから【落ち込みのフォロー】という『精神面でのカバー』や『医者/看護師の指示を仰ぐ』『重度化した時のカンファレンス』という【看護師の役割を果たす】ことは心の安定をはかる上でも重要である。そして「身体の具合が悪いときは大事にさせてもらう」気持ちが伝わるのが【自分の存在感を感じるケア】となり、家族との面会同様、生活の安心感を支えていると考えられた。

5) 事例5について

本事例は、生活の主体性・他者との関わり・生活の安心感領域で施設入居前後の変化はなく、本人のやりたいこととして日記を書くことや習字、ハモニカがあり、そのような本人の意

識も主体性の維持に関係があると考えられた事例である。また、【今を維持してあげたい】【本人の納得を大事にする】【以前の生活を大事にする】【満足感をもってもらう】【一人の人として尊重する】は、そのやりたいことを現実に行えるような支援であり、主体性の維持と関係が深いと考えられた。また、「家との関係は本人と切り離せない」ことから【外泊・外出支援】が〔家族の週1回の面会〕時にも意識されていると考えられた。身近な社会参加領域では、〔パーキンソン病のため言葉がうまく出ないことがある、他の利用者との会話が難しい〕ことから、悪化を防止するための疾病管理、他の利用者とのコミュニケーションの仲介役としての意識が必要と考えられた。【病状の変化に早く気づいてあげたい】はパーキンソン病の悪化予防の為にも重要である。身近な社会参加領域に関することでは、【活動のきっかけをつくる】【得意なことに関するアドバイス】【役割をもっといただく】【畑作業を仕事にする】が抽出された。しかし、スタッフの意識的なケアと本人の社会参加意識には関係性がみられなかった。社会参加意識を高めるためには、自主的に自分で畑作

表2-⑤ ケアスタッフの意識・行動要素（事例5）

| | カテゴリ | サブカテゴリ |
|-------------|------------------|--|
| 生活の 主体性 | 今を維持してあげたい | 今を維持してあげたい 病気の会参加を維持してあげたい |
| | 本人の納得を大事にする | 決定はEさんがするので、常に問いかける 同意を得てから次の行動をすることが基本 理由を伝え同意を得る |
| | 以前の生活を大切に | 一人でやりたいこともあると思うから前使っていた机を持って来ていただく されることを大切に |
| | 満足感をもってもらう | 言われることに沿う 楽しいことをつくる 喜びを感じることをする |
| | 一人の人としての尊重 | 人物的に尊敬しているので、立ててお話を する 当たり前のことを伝えることを心がける |
| 他者との 関わり | 外出・外泊支援 | 家との関係持つための定期的な奥さんとの外出 おうちに帰られたらよい 家に帰って奥さんと2人の時間を過ごしてもらう |
| | 共通の話題をもつ | 日記の話題を一緒にもつ |
| 社会への関心 | 情報提供 | 地域の一員としての自覚を持つために情報を伝える |
| 身近な 社会参加 | 役割を持っていただく | 皆さんが集まる場であいさつをしてもらう |
| | 畑作業を仕事にする | 頼りになる職員と一緒に畑仕事をするを習慣にする 仕事の感覚をもつために畑で作ったものを売るとよい |
| | 活動のきっかけをつくる | 仕事のきっかけづくりをしたい クラブ活動に誘う |
| | 得意な事に関するアドバイス | 畑や田んぼに関するアドバイスを自分にもらう |
| 生活の 安心感 | 落ち込みに関するフォロー | 落ち込んだ時の励まし方を考える 自分で落ち込まないように無理されないようにフォローする |
| | 病状の変化に早く気づいてあげたい | パーキンソン病特有の変化に早く気づいてあげたい |

業をしたいという本人の気持ちをくみ取り、思いのままに作業をしてもらうことが必要と考えられた。また、その際は時間を決める等無理のないような配慮を行い、本人に納得してもらうことが重要と考えられた。また、〔外泊を3月に1回〕しており、帰ったときの散歩、草取りが生活の安心感につながっていると考えられた。

6) 事例6について

本事例は、生活の主体性・他者との関わり・生活の安心感領域で施設入居前後の変化はなく、〔特養入居前に当施設の短期入所サービスを利用しており、本人がここならと思ひ、入居された〕ことが生活の主体性の維持に繋がっていると考えられた事例である。また、特養に入居してから家族との距離が出来、お互いの良い点を見て話が出来るようになり、家族とのほど

よい距離感が重要と考えられた事例である。【入居までの家での生活を大事にする】【できるだけ長く出来ることを維持してもらいたい】【本人の希望や思いを大切に】【気持ちよく生活していただくための健康管理】【生活の潤いを大切に】は、生活の主体性に繋がっていると考えられた。また、「夜間のトイレ介助が大変で最近では家につれて帰られない」ため、『家族との関係の橋渡し役になる』『家族との関わりを良好に保ってあげたい』という意識が【家族とのほどよい距離感をつくること】に役立っていると考えられた。『主治医への信頼感』が強く、体調が悪いときは、家族やスタッフの受診の付き添いを受けながら主治医と話をすること、また家族と話をすることなどが生活の中の楽しみになっていることから、外出時の話題等を工夫し、社会への関心がもてるようにするこ

表2-⑥ ケアスタッフの意識・行動要素（事例6）

| | カテゴリ | サブカテゴリ |
|---------|-------------------------|--|
| 生活の主体性 | できるだけ長くできる事を維持してもらいたい | 自分でできることはやってもらいながら、自分の力を維持してもらいたい |
| | 入所までの家での生活を大事にする | 家での生活を苑でも維持できるような関わり Fさんの希望・思いに気づくことが大事だと思う |
| | 本人の希望や思いを大事にする | やりたいこと希望等をかなえてあげたい 言葉にされない思いに気づくことが大事だと思う |
| | 気持ちよく生活していただくための健康管理 | 気持ちよく生活していただくための健康管理 毎日の声かけ・健康観察 主治医への信頼感 |
| | 生活の潤いを大切にする | 生活に潤いを持ってもらいたい |
| 他者との関わり | 家族との良好な関係をつなげていきたい | 家庭への外泊への支援・ Fさんと家族との関係を維持するための橋渡し役になる 家族との関わりを良好に保ってあげたい Fさんの希望・思いを家族に伝えることも役割だと思う 家族との外出の支援 |
| | 馴染みの人間関係を形成する・維持する関わり | 馴染みの人間関係を保ってあげたい |
| 生活の安心感 | 生活の支援者として信頼してもらえらる努力をする | スタッフのケアへの要望を仲介すること 馴染みのある話題・得意な話題でコミュニケーションをとる 苑で楽しく生活して貰うためのスタッフの接し方・姿勢を配慮する |
| | 体の痛みを最小限にするための支援 | 体の痛みを最小限にするように意識した関わり |
| | 緊急時の支援 | 体調を崩したときに看護すること 体調を崩したときの医師への連絡調整 |

とが必要と考えられた。生活の安心感領域の得点が施設入居前後で変化がないことから、それに関連する【身体の痛みを最小限にする支援】【生活支援者として信頼してもらえらる努力をする】【緊急時の支援】は重要であると考えられた。

7) 事例7について

本事例は生活の主体性・社会への関心・他者とのつながり・生活の安心感領域で施設入居前後の変化はなく、聴力障害があり、本、新聞、テレビ、園芸、盆栽、薄茶をたてることなど、一人でできることを趣味としており、趣味を生かすことで生活の主体性が維持できていると考えられた事例である。【自分で継続できる事を継続し、生活レベルを維持してもらいたい】【気持ちよく生活していただくための健康管理】【本人の意志を大切にする】が、その行動を支えていると考えられた。聴覚障害があるため、ケアスタッフには「情報がそれでしか入らないから」【視覚を大切にしてほしい】という意識があった。生活の安心感領域に関しては、【馴染みの

人間関係形成支援】を受けながらグループの中で過ごしており、話はできなくても、そのメンバーの中にいることで安心と感じていると考えられた。【基礎疾患に対するフォローと指導】は、そのような過ごし方ができる体調管理のために重要と思われる。身近な社会参加領域には特養入居前に比べて得点が低くなっていた。これは、特養生活の中で「役割がない」ことが要因と考えられた。本人の趣味に沿った役割づくりが必要である。また、スタッフも【苑での活動に参加して欲しい】という意識はあるが、耳を頼った余暇活動が多いために、本人には参加しにくいことが要因と考えられた。難聴のある利用者へは、ケアスタッフ等が参加を勧める意識が必要だが、周りの人への配慮が難しいため、十分にできていないと考えられた。盆栽、園芸が好きということから、その点に結びつく社会参加の場づくりの意識が必要である。

8) 事例8について

本事例は生活の主体性・他者との関わり、身

表2-⑦ ケアスタッフの意識・行動要素（事例7）

| | カテゴリ | サブカテゴリ |
|---------|-----------------------------|--------------------------------------|
| 生活の主体性 | 自分でできる事を継続し、生活レベルを維持してもらいたい | 自分でできることは自分でやってもらいながら生活レベルを維持してもらいたい |
| | 気持ちよく生活していたくための健康管理 | 毎日の巡視と日常の健康観察 日常の声かけ |
| | 本人の意思を大切にす | 本人の意思を大切にす |
| 他者との関わり | 馴染みの人間関係形成の支援 | 気の合う仲間作りのためのグループ作り |
| | 外出の支援 | 外出の支援 |
| 身近な社会参加 | 苑での活動に参加して欲しい | 職員とレクに参加してほしい |
| | 視覚を大切にしてほしい | 視覚を大切にしてほしい |
| 心の生活安活 | 基礎疾患に対するフォローと指導 | 基礎疾患に対するフォローと指導 |

近な社会参加・生活の安心感の4領域について特養入居前後で変化がなかった。【表情の変化を読み取ることが大切】【身体の状態維持のための関わり】【できることを大切にする】は主体性の維持に関係していると考えられた。また、〔当施設入居前も他の施設で生活をしており、娘の家の近くに当施設が出来たため、本人が希望して入居している〕ことも主体性の維持に関係していると考えられた。社会への関心領域では入居前に比べて得点が上がっていた。その理由は当施設に入居後、習い事をして、趣味が広がったこと、また、規則がない当施設において自分の気持ちを優先して行動出来ることが影響していると考えられた。【苑での人間関係を良好に維持するための支援】【家族との関わりを大切にす】が抽出された。本人には軽度の知的障害があり、ケアスタッフや他の利用者とのコミュニケーションが時々困難であり、本人と他者の関わりには課題があると考えられた。身近な社会参加領域の得点は入居前と比べて変化はなかったが、ケアスタッフの意識に関する要素は特に抽出されなかった。これは、施設内で〔朝夕のおしほり配りを自分の役割〕とし、〔苑内での行事に参加をしている〕ことで社会参加ができており、スタッフが積極的に意識しなくてもできているからと考えられた。生活の安心感領域に関する要素は【職員との関係形成を支

援する】が抽出された。〔家族の面会も週2回〕行われており、面会時は本人の話を聞いたり、家族や親戚など本人にとって身近な人の様子を話すことを今後も継続することが重要と考えられた。

9) 事例9について

本事例は、特養入居前後で生活の主体性・他者との関わり・生活の安心感の3つの領域の得点に変化がなく、〔自分のことは自分でしたい〕という気持が主体性の維持に繋がっていると思われた事例である。【本人の意志を尊重する関わり】という基本的な人権尊重の態度と、【他者との関わりの中でリハビリに参加し、維持して欲しい】というADL支援が〔自分のことは自分でしたい〕という気持ちを支えていると思われた。家族が遠方にいるため、「家族に手紙を書くことを勧める」ことも【家族との関係を維持するための支援】として重要と考えられた。生活の安心感に関する要素は【失禁に対して傷つけない関わり・言い方を配慮する】【身体の痛みを緩和する】が抽出され、領域得点が維持できていることから有効と考えられた。本人は面接の中で〔施設の中での役割がない〕と答えている。本人の意志にマッチした役割づくりが今後必要である。また、地域で行われているミニデイサービス参加を希望したが受け入れが困難であった。地域活動への参加を進めるには、

表2-⑧ ケアスタッフの意識・行動要素（事例8）

| | カテゴリ | サブカテゴリ |
|--------------------------------------|----------------------|---|
| 主生 体活 性の | 表情の変化を読み取ることが大切 | 表情の変化を読み取ることが大切 |
| | 体の状態維持のための関わり | 体のためにも体重を減らしてもらいたい 下肢の浮腫を軽減するための関わりを実施してもらいたい |
| | できる事を大切にする | 必要なことはHさんの生活に介入していくことが大切 |
| 他 者 と の 関 わ り の | 苑での人間関係を良好に維持するための支援 | 他利用者さんとの関係を悪くしないための予防的な関わり 脳梗塞の後遺症の症状もあるので、あまり深入りしない関わりがよいと思う。 |
| | 家族との関わりを大切にする | 家族との関わりが大切だと思う |
| 安生 心活 感の | 職員との関係形成を支援する | なるべく職員との外出を行いたい |

表2-⑨ ケアスタッフの意識・行動要素（事例9）

| | カテゴリ | サブカテゴリ |
|--------------------------------------|----------------------------|--|
| 主生 体活 性の | 本人の意思を尊重する関わりをする | Iさんの好きなことに取り組んでもらいたいという思い 気持ちを表出してほしい |
| | 他者との関わりの中でリハビリに参加して維持してほしい | 他者との関わりの中でリハビリに参加して維持してほしい |
| 他 者 と の 関 わ り の | 家族との関係を維持するための支援 | 家族との関係を維持するための支援 |
| 安生 心活 感の | 失禁に対して傷つけない関わり・言い方を配慮する | 失禁に対して傷つけない関わり・言い方を配慮する |
| | 体の痛みを緩和する | 足の痛みを緩和するための関わり |
| | 日常の健康管理 | 毎日の巡視と健康観察 |

地域の活動を担っている市民の特養生活者に対する理解が必要である。

2. 特養で生活する高齢者のエンパワメント支援に関するケアスタッフの意識

1) 生活の継続性を重視した本人の意志を尊重する

個人のエンパワメント支援のための理念や高齢者が自ら生きる力によって生きることを支えるケアの理念として自己決定、残存能力の活用、生活の継続性、住民第一主義等が必要であると言われている（星，2004）（小田，1999）。事例1，4，6，8は特養入居の意思決定を本人がしていた。また事例3，9は「自分のことは自分でしたい」と思っていた。事例1，2，4，5，7，9は【本人の意思（納得）を尊重する（大事にする）】，事例5，6は【以前の生活を大事にする】，事例2，3，4，5，6，7，9は【できることの維持】が抽出された。これらの事例はすべて特養入居

前後の得点に変化はなかった。入居の自己決定に合わせ、この3つの共通要素は生活の継続性を重視した本人の意志を尊重することである。このことがエンパワメント支援になると考えられた。

2) 視聴覚機能を補う情報提供

特養で生活する高齢者にとって、外出は社会参加意識を高めるために有効である（2004，鈴木）。事例1，4では【外出させてあげたい】が抽出されたが、「外出できればいいと思っています」から、実際には外出があまりできておらず、ほとんど毎日施設の中で生活が完結していると考えられた。事例5から【情報提供】，事例7から【情報入手できる視覚を大切にしたい】が抽出された。事例5は、ケアスタッフが本人に対して地域の一員としての自覚をもってもらうために、地域での出来事を伝える意識をもっていた。事例7は聴覚障害があり、情報が耳から入りにくいため、【視覚を大切にしたい】

欲しい】という意識があった。外出することで施設の外の社会に触れることは重要であるが、本人のニーズに沿った頻回の外出は困難な場合が多い。そのため、社会からの情報を入手する視聴覚機能を補うケアスタッフの意識がエンパワメントを支援すると考えられた。

3) 馴染みの人との関係維持と新たな人間関係づくり支援

事例3, 5, 6, 7, 8, で〔家族の面会が週1回以上〕あった。事例3, 6, 8, 9から〔家族との会話を大切にする〕, 事例6から〔馴染みの人間関係を維持する関わり〕, 事例5から『定期的な奥さんとの外出』, 事例7から〔外泊・外出支援〕が抽出された。これらの事例はすべて特養入居前後での他者との関わり領域得点に変化がなかった。事例6では、ケアスタッフが本人にショートステイを利用している馴染みの人に会いに行くことを勧めていた。上野らは、施設生活によって家族と離れているからこそ、その結びつきを維持する工夫が求められていることを強調している(上野, 2006)。これらのことからケアスタッフが家族と本人の関係や家庭生活をしていた頃の馴染みの人と本人の関係を意識した関わりがエンパワメントを支援すると考えられた。

また、事例3では〔他の利用者さんとの関係を創る〕事例4では〔職員とのよい関係を創る〕が抽出され、2つの事例とも他者との関係領域得点は維持されていた。特養で生活を始めた高齢者は安心して自分らしく生活できるつながりを自ら形成する力をもっている(小倉, 2002)。特養の中で新たな人間関係づくり支援も重要である。

4) 日常生活の中での役割づくり

事例3, 4, 5では〔役割をもっていただく〕が共通して抽出された。事例3, 4ではその役割が特養内での手作業であり、事例5では『皆さんが集まる場であいさつをしてもらう』という内容だった。しかしどちらもその意識によって社会参加領域得点が維持されていなかった。これは本人の得意な分野や趣味を生かした役割になっていないこと、なっていないでもその機会が少ないことが要因と考えられた。また、事例9では、地域で行われているミニデイサービス参

加を希望したが参加できず、施設内で過ごすことが多くなっていた。ケアスタッフには高齢者と地域社会との接点を見つけ、地域社会の中に参加できるような機会を提供することが求められている(澤田信子他, 2006)(伊藤, 2006)。地域で暮らす高齢者との接点を特養の高齢者をもつことで、地域の人にも施設がよくわかり、地域との交流のきっかけとなる。本人の意思で選択でき、日常生活の中で実行できるような役割づくりや、地域の活動に参加し、地域に暮らす人々と関係を創ることがエンパワメントに繋がると考える。

5) 看護師による疾病の管理

事例4では〔看護師の役割を果たす〕が抽出された。また、事例1, 5で〔(病状の)変化に早く気づく〕, 事例7, 9で〔身体の痛みを緩和する(最小限にする)〕, 事例6で〔緊急時の支援〕が抽出され、これらはケアワーカーではなく、看護師の役割と考えられた。生活の安心感を維持するためには本人がもつ様々な障害、疾病からくる不快感を取り除く必要性が示唆された。本人のもつ疾病の管理、緊急時の適切な対応の補償意識がエンパワメント支援になると考えられた。

VI. 結 論

2年に渡り、社会関連性指標を用いて特養生活を送る高齢者のエンパワメント支援のポイントを検討した。その結果、生活の主体性を維持する要素として“①新たな生活への受け入れ支援”と“②生活の継続性を重視した本人の意志の尊重”, 社会への関心を維持する要素として“③視聴覚機能を補うケア”, 他者とのつながりを維持する要素として“④家族とのほどよい距離感を感じるケア”と“⑤馴染みの人との関係維持と新たな人間関係づくり”, 身近な社会参加を維持する要素として“⑥日常的な役割づくり”, 生活の安心感を維持する要素として“⑦本人の落ち着く居場所づくり”と“⑧看護職による疾病の管理”の8点が明らかとなった。

VII. 謝 辞

本研究を行うにあたり、ご協力頂いた特養利用者の方々、家族の方々、職員の方々に深謝致します。

引用文献

- 安梅勅江 (2000) : エイジングのケア科学, 11-14, 川島書店, 東京.
- 伊藤セツ (2006) : 社会福祉士養成講座介護概論, 139-146, 中央法規, 東京.
- 伊藤智子, 加藤真紀, 梶谷みゆき, 常松さゆり, 諸井望, 金築真志 (2007) : 特別養護老人ホームで生活する高齢者のエンパワメント支援に関する検討～施設入居前後の社会関連性の変化から～, 島根県立大学短期大学部出雲キャンパス研究紀要 1, 51-58.
- 上野徳美, 林智一, 山本義史 (2006) : 老人保健施設入所者のサポート。リソースと心理的援助に関する研究, 臨床心理学6(1), 71-80.
- 小倉啓子 (2002) : 特別養護老人ホーム新入居者の生活適応の研究, 老年社会科学, 61-69.
- 小田兼三, 杉本敏夫, 久田則夫 (1999) : エンパワメント実践の理論と技法, 152-165, 中央法規, 東京.
- 鈴木栄 (2003) : 特別養護老人ホーム, 38-40, 日本放送出版協会, 東京.
- 澤田信子, 西村洋子 (2006) : 社会福祉士養成テキストブック介護概論第2版, 133-135, ミネルヴァ書房, 京都.
- 星旦二 (2004) : 高齢者の健康特性とその維持要因, 101-122, 東京都立大学出版会, 東京.
- 松岡洋子 (2002) : デンマークにおける「施設の住まい化～施設介護を超えた北欧最前線福祉事情～, 介護施設管理, 5, 125-135.

Study on Empowerment Support to the Aged living in Special Nursing Homes (Second Report) : Analysis of Recognition and Action of Care Staff

Tomoko ITO, Maki KATO, Miyuki KAJITANI

Sayuri TSUNEMATSU*, Nozomu MOROI** and Masasi KANETSUKI***

Key Words and Phrases : special nursing home, aged, empowerment, relation to the society, care staff

* Day Service Institution for the aged with Dementia, “NPO Corporation Yawaragi”

** Special nursing home for the aged “Kosuien”

*** Izumo City Office Health Promotion Division